

社会的自己評価と有生性に対する好みの関連

吉岡 瑞穂

本研究は、社会的な自己評価の高さが、顔写真の好みにおける有生性(生物として生きているように感じられる程度)の知覚に与える影響を検討することを目的とした。実験に先立って、(1)自己評価の低い人は有生性の高い写真だけでなく、低い写真も好む(2)自己評価の高い人は有生性の高い写真のみ好む、という2つの仮説を立てた。実験参加者は Texas Social Behavior Inventory で自身の社会的行動に対する自己評価を行い、顔写真 22 枚の好ましさを Likert の 7 件法で評価した。有生性を 0%から 100%まで 10%ずつ変化させた男女の顔写真各 11 枚、計 22 枚が提示された。実験終了後、自己評価の点数から参加者を自己評価低群と高群に分け、顔写真の性別ごとに、参加者間要因として自己評価(2 水準:高低)と参加者の性別(2 水準:男女)の 2 要因と参加者内要因として有生性(11 水準:0%~100%)の 1 要因による 3 要因混合分散分析を行なった。従属変数には画像の好ましさ評価を使用した。分析の結果、女性顔においては自己評価と有生性の間に関連がないことが示され、2 つの仮説はいずれも支持されなかった。男性顔においては自己評価低群と高群のどちらも、参加者は好ましさの評価について有生性の主効果が有意であったが、多重比較の結果いずれの顔写真ペア間でも差は有意でなかった。よって、仮説はいずれも支持されなかった。しかし、女性顔と男性顔のいずれにおいても有生性の主効果が有意であったことから、好ましさの評価が有生性に影響されることが示された。自己評価の主効果と、有生性との交互作用がどちらも有意でなかったのは、参加者の自己評価点数に十分な差がなかったためである可能性がある。さらに、女性顔では有生性 80%、男性顔では有生性 70%の顔写真が、有生性 100%の本物の顔写真よりも好まれた。これは先行研究とも一致する結果である。この理由として、有生性を減らす過程で顔の魅力度が上昇した可能性が考えられる。今後の研究では、顔写真の加工を客観的に行うこと、日本人を対象に実験を行うこと、参加者間で実験環境を統一することで異なる結果が得られる可能性がある。(応用認知心理学)